

令和元年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部
鹿児島県知事表彰 優秀賞

「いざというときに」

鹿児島市立城西中学校 2年 福島 彩音

「明日と明後日は、休校になりました。」

帰りの会で、急に先生にそう言われた。私は、すごく驚いた。その日の3日ぐらい前から、鹿児島では雨が降り続き、時々、警報も鳴っていた。また、私の家の周りの山は、一部崖が崩れてしまっていた。しかし、今回はそれよりもっとひどい、26年前に48名もの死者を出した、あの8・6水害級の雨が降るらしい。8・6水害のことは、防災訓練や実際に8・6水害を経験した父に当時の様子を聞いたり、その時期になるとテレビで特集が組まれたりしてよく知っているつもりだ。しかも、私が通っていた小学校には8・6水害の時に浸水した水位を記した看板が立っている。それは、小学6年生の時の私の腰の高さぐらいまであり、そのときの水量のすごさが分かるものだ。そんな恐ろしい8・6水害級の雨がまた降るのか。普通の大雨でも近くの崖は崩れているのに、休校になるほどの雨ってどうなってしまうのだろう。3日後には、もう二度と会うことができない人が出てしまうかもしれない。それどころか、私の家の裏にある山が崩れてきて、自分が被災してしまうのかもしれない。と不安がどんどん募ってきた。

次の日。朝から、すごい雨音で目が覚めた。今までに見たことがないくらいの雨が、すでに降り始めていた。今日一日、無事に過ごせるのか不安に思った。しかも、母も父も仕事で、私は小6の弟と小1の妹と3人で留守番をすることになった。母が2階の方が安全だと言うので、私たちは2階で過ごすことにした。ずっと弱まることなく屋根を叩き続ける雨。家の窓から見える、今にも崩れてきそうな山。過去の水害や、土砂災害のこと、その災害の被害者のインタビューや今の各地の被害を放送しているテレビ。避難レベルが上がるごとに鳴り響く避難警報アラーム。

「これ、本当に大丈夫なの？」

と何度も何度も聞いてくる弟と妹。たまに聞こえてくる緊急車両のサイレン。それらのことが波のように次々と私を襲ってきた。我慢ができず両親に、

「本当に避難しなくて大丈夫？」

と電話で尋ねるが、

「その山は、8・6水害の時も崩れなかったから大丈夫。川からも遠いし、もし川が氾濫したとしても水は来ないから。心配ならおじいちゃんの家に行って。」

と言われてしまう。テレビでは、「過去の災害で大丈夫だった山や川でも、油断しないでください。」と言っているのにも思いつつ電話を切った。それからは、雨は全くやむことはなかったけれど、無事に一日を終えることができた。しかし、いつもの何倍にも長い一日に感じた。

翌日、その日は、そんなに雨は降らなかった。私と弟は、土砂災害の対策や、崩れ落ちる前の予兆などを調べてみた。自分でできる対策としては、ハザードマップの確認、避難経路を実際に歩いてみる、非常用持ち出し袋の用意の3つが上がっていた。防災訓練などでは、いつも言われるこの3つだが、私の家では、このうちハザードマップの確認しかできていない。非常用持ち出し袋は、一度作ろうということにはなったけれど、いつの間にかその話は、後回しになっていた。なにか大きなきっかけがないとなかなか防災について家族で話すことはないが、自分からそういう話をして、何かあっても、家族みんなの命が守れるような対策をしていきたいと思った。また、土砂災害には、3つの種類がありそれぞれに予兆があることも分かった。土石流では地鳴りがする、崖崩れでは小石が落ちてくる、地すべりでは樹木が傾くなどの現象が起こるらしい。これらを知っておけば、土砂災害を回避できる可能性もあるという。実際に崩れてきた時の逃げ方としては、時速40キロメートルもの速さで進んでくるから、直角に逃げるといいらしい。

今回の大雨では、私の家には被害はなかったけれど、実際に土砂災害が起こっていたら、何も対策をしていなく、土砂災害の知識もなかったから、本当に死んでしまっていたかもしれない。でも、今回のことがあったから、対策も分かり、知識も得ることができた。あとは、それらを実行していくだけだ。土砂災害は、家も命も何もかも一瞬で奪っていくようなものだけれど、今回調べたことをいかして、もし起きたときには、せめて命だけは守りたい。